小児がん患者さんのための新型コロナウイルス対策について

北海道大学　小児科学教室　真部淳

新型コロナウイルスは、まだ収束の見通しは立たず、困った状況ですが、パンデミック発生から６ヶ月をすぎ、様々なことがわかってきました。実は、小児がん患者はこのウイルスに感染しても、重症になる例は少ないのです。小児がんの半数は白血病、半数は固形腫瘍ですが、この傾向はどちらでも同じです。

むしろ問題なのは、この感染症を恐れて医療機関を訪れることを躊躇することにより、小児がんの診断が遅れて致命的になることです。幸い、日本ではそのような報告はありません。

小児がんの治療中に新型コロナウイルス感染症がなぜ重篤化しないか、その理由はまだわかりませんが、まず一般的に小児は免疫系がナイーブで、このウイルスが感染しても重篤化しにくい。もう一つは、化学療法によって免疫反応が下がっていることが、却って感染症の重篤度を下げるという説があります。

もちろん、パンデミックが始まって以降、家庭でも社会でも病院でも感染症への対策（マスクの着用、面会制限、隔離の実行など）が徹底的に行われ、新型コロナウイルス以外の感染症が減っていることも患者さんの状態が良いことに寄与しています。

引き続き緊張する状況は続きますが、こと小児がんに関しては、心配しすぎる必要はありません。

結論です。１）がんの治療中の子どもが新型コロナウイルスに感染しても、命に関わる重篤な転機を取ることはほとんどない。２）患者さんの受診控えによって、小児がんの診断が遅れることが世界中で問題になっている。

Hrusak O, Kalina T, Wolf J, Manabe A, et al.
Flash Survey on SARS-CoV-2 Infections in Pediatric Patients on anti-Cancer Treatment. Eur J Cancer. 2020;132:11-16.

COVID-19感染が蔓延している地域（日本を含む）にある小児がんセンターを対象に、化学療法中の小児症例における感染の実態をWebでの調査結果が速報されました。

25か国32センターで治療を受けている小児がん患者約10,000症例のうち200症例以上にCOVID-19の検査が行われ、感染診断例は9例ありました。一部に好中球減少に伴う発熱を認めましたが、COVID-19感染に伴う症状は軽度なものしか認めませんでした。

COVID-19の病状の重篤化には注意が必要ですが、COVID-19の予防措置によって悪性腫瘍の治療の遅れや妨げに繋がらないようにすべきと述べてられています。

Yang-Yang Ding, et al.
Delayed cancer diagnoses and highmortality in children during the COVID-19 pandemic. Pediatr Blood Cancer. 2020; e28427.

COVID-19パンデミック期の小児悪性腫瘍診断の遅延による重症化

アメリカ合衆国の3次医療機関2施設（フィラデルフィア小児病院とスタンフォード小児病院）からの報告です。 COVID-19パンデミック期において、新規小児がん患者の受診が一定期間途絶えた後に、蘇生処置を要するような重症化した症例が続き、急性期の死亡例も認められました。いずれの患者もCOVID-19は陰性でした。またこのような新規小児がん患者のPICU入室の割合も増加しています。

これは医療機関受診の遅れや、腫瘍による症状(発熱、倦怠感、呼吸器症状等)がCOVID-19に類似していることによる対応の遅れが重症化の原因となっていますし、身体所見の確認ができない遠隔医療の限度も考えられます。

通常の小児がんの生存率の良さを考慮すると、これらのCOVID-19パンデミックの二次的な医療ケアへの影響は問題です。